

おわりに

どのくらい前になるのでしょうか……生徒指導困難校で養護教諭としての在り方を大いに問われたのは。

いじめが原因で不登校になった子どもが保健室に登校します。

「前みたいに、毎日学校に来たい…教室で勉強もしたい。でも、みんなが怖い。みんなの声が怖い。先生、助けて…」。そう言い残し二度と姿を見せなかったあの子。

「クラスでいじめ問題が続いているのに何もできない自分が嫌だった…」。突然転校したあとに届いた声。

「先生方は、どうせ私たちがいじめていると思っているでしょ！ もう、いいよっ！」。泣きながら訴えたあの子どもたちの声が、非力だった私の耳に今も聞こえます。

いじめや不登校等の問題に苦しむ子どもたちを抱える保護者、そして担任や関係教職員にも、養護教諭としてどう寄り添い、どう見守り、どう支援していくことが未来の子どもたちの輝く笑顔につなげることができるのか、必死で模索してきた数十年です。

実は私の娘も、小学校でいじめに遭い、中学校ではクラスで起きているいじめ問題を先生にSOS発信したことで「チクリ魔」と呼ばれ、再びいじめに遭います。いじめの傍観者がいじめを受ける側に転じてしまったのです。

当時、良き母親を自負し、そんな我が子の苦悩など露知らず、娘がいじめの体験を話してくれたのは卒業後数年経過したころでした。私はやっとの思いで「そんな大変な状況のなか、どうやって毎日学校に行くことができていたの？」と聞くと、「たった一人、わかりあえる友だちがいたから頑張れたかな……」と答えてくれました。また、彼女はこうも言いました。「家は学校関係者、心配かけるし…先生って私たちのことわかっていないよ…。でも、話せる先生はいたかな…」。

いじめている子もいじめを受けている子も、多くは誰にも言えずに心を閉ざし、耐え忍ぶことで対処しています。親や大人に詳細を尋ねられても、いじめられている事実を否定することも少なくないのでしょう。

実際、子どもたちの人間関係やいじめなどの問題の多くは、私たち大人の目の届かないところで起き、親や大人は本当に何も知らないことが多くあることを実体験しました。「私が、何とか解決してあげよう！」と頑張れば頑張るほど、かえって事態を悪化させてしまったこともあったのかもしれない。その結果、子どもたちの世界がどうなっていくのか、私たち大人よりも

子どもたちがよく知っているのですね。大人だけで解決することの難しさ、無力さを、職務と実生活の両方で身をもって痛感した瞬間でした。

娘が不登校に至らず、命を絶つこともなく、学校生活を最後まで送ることができたのは、友だちや話せる先生の存在が大きかったのでしょうか。もちろん、他の多くの子どもたちにとってもそうだと思います。友だちの支えは、時として親や大人からの支援よりも数百倍の影響力をもち、私たちが考えている以上に、いじめや不登校を跳ね返すためのとてつもなく大きなパワーになるのだと思います。そして、誰も何も責めず静かに見守り、一歩後ろから未来へ導いてくれる大人の存在が、子どもたちにとって大切であることは言うまでもありません。

すでに多くの先生方が「解決志向アプローチ」や「ピア・サポート」を実践していらっしゃると思います。「サポートグループ・アプローチ」は、その2つを合体させたハイブリット・モデルです。本書は、どんなに忙しくても「やってみよう！」と思ったその時から、いつでも、どこでも、誰にでも、サッと開いてスイスイ進めることができるように配慮して書きました。子どもたちと大人たちが協働して、このシンプルで実践的な方法に取り組んでいただくことが私の願いです。

Let's サポートグループ・アプローチ！ 明日からさっそく実践してみてください。実践したその時から、必ず何かが変化します。その変化は希望と可能性のそよ風です。その風はきっと、子どもたちをはじめ皆さんやその周囲の人たちの追い風へと変わり、より輝く未来へと導くことでしょう。

本書を閉じるにあたり、たくさんの先生方のご指導と温かい励ましをいただきました。深くお礼と感謝を申し上げます。

そして、敬愛する黒沢幸子先生と一緒に本づくりができたことに、心から喜びを感じます。また、本書の執筆の機会を与えてくださったほんの森出版の小林敏史さん、この場をお借りして感謝申し上げます。

2015年5月

八幡 睦実